

# センタージャーナル

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016

名古屋市中区橋二丁目8番55号

TEL (052)323-3686

FAX (052)332-0900



名古屋空襲の焼失を免れた名古屋別院の「東門」。老朽化が著しく近年は通行できなかったが、ご門徒の寄進により復元修復がなされ7月15日の竣工式後、文化財として登録予定。

(写真の無断転用はご遠慮ください。)

立つ！  
いのちの大地に  
聞く！  
いのちの叫びを  
真実の学びから、  
今を生きる「人間」としての  
責任を明らかにし、  
ともにその使命を生きる者となる。

・聖典研修 第13・14回  
『仏説阿彌陀經』 ②・③  
—その教義と真宗の儀式—

### 御遠忌を終えて

- ・研究生報告  
演劇「親鸞・恵信尼 結婚披露宴-750年の時を超えて-」 ④
- ・大谷派の近現代史  
「第27回平和展-けされた親鸞聖人-」
- ・現代社会と真宗教化  
シンポジウム「東日本大震災から問われる私」 ⑤
- ・尾張の真宗史  
「親鸞聖人と尾張門徒-その信仰のすがた-」展

・INFORMATION ⑥

◆イラストカット集(※寺報などにご利用ください)

## 恩徳讃——ここに門あり——

録音された自分の声を聞くと、何とも言えぬ違和感を抱く。自分の声は「もっと良いはず」と、聞いているのだ。しかしその音声は、周りの人がいつも聞いている私の声だ。発声している本人だけは、骨伝導された声を聞いている。「こんなはずじゃない」と思うのは誤った自己認識か。

このたび厳修された名古屋教区・名古屋別院 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要も結願日中、結讃は「恩徳讃」で締めくくられた。また、定例法話や講座でも最後に皆と一緒に恩徳讃を唱和する。このことは単なる伝統なのだろうか。「正像末和讃」に訪ねると、

仏智ぶつちの不思議ふしぎをうたがいて

自力じりきの称念しょうねんこのむゆえ

辺地へんち懈慢けまんにとどまりて

仏恩報ぶつおんほうずるころなし

(中略)

已上二十三首しじゅうさんしゅう仏智不思議ぶつちふしぎの弥陀みだの御ごちかいをうたがうつみとがをしらせんとあらわせるなり

愚禿善信ぐとくぜんしん作

〔真宗聖典〕五〇五〜五〇七頁

と、恩徳讃の後、十九・二十願の信心批判「開顕智慧段」をもって「仏智疑惑」を顕わされる。

この御遠忌との値遇は、私の生涯においてたった一度のかけがえのない「不思議」な出遇いである。そこで申す念仏も、宗祖は「仏智の不思議」であるという。しかし、人の多く集まった場の威勢のなか不思議を自力で思議しだす私がいる。

「十方衆生よ」と喚びかけ、「あらゆる人々を助けよう」との弥陀の本願が名号となった念仏であると理解しつつも、この身を助ける念仏と受け止めていない私。蓄積された知識と、その知識を解釈することによって助かると思議しているのである。

「南無阿彌陀仏」の「ただ念仏」が私を助けるのに、助かる私がいっの間にかな念仏を評価している。自身の力では永遠に認識できない自己の本当の姿。どこまでも「もっと良いはず」と自己認識をしている自身の姿を、宗祖は「うたがうつみとが」であると、愚禿の名告りをもって述べられたのか。

歩み続け、努力を積み重ね、困難を乗り越え、成長したと思ひ込んでいる私。御遠忌という尊い経験を経て浮かび上がるのは、立派な私ではなく、恥ずかしい自分の姿であった。

今一度、「ここに門あり。入るや、出ずるや」と恩徳讃は入出二門となつて、私を振り出しに戻してくれていたのだ。

(主幹 荒山 淳)

聖典研修

『仏説阿弥陀経』—その教義と真宗の儀式—

第十三回 二〇一六年一月二十一日(木)

宝樹莊嚴

講師 廣瀬 惺氏 (同朋大学特任教授)



自然環境によって表現された浄土

今回から「正宗分」に説かれる「依報莊嚴」に入っていきます。これは「依って生きる莊嚴」ということです。環境としての浄土と申し上げることができるとかと思えます。『阿弥陀経』では「宝樹莊嚴」「宝池莊嚴」「天樂地華莊嚴」「化鳥風樹莊嚴」の四つがその内容として説かれています。樹や池や花など、自然環境の事物をもって極楽浄土の世界(生活)が表現されているのです。

これらの浄土莊嚴を表す言葉をそのまま受け取りますなら、「何か美しい世界が説かれている」ということで終わってしまいます。前回も申しましたように、これは、お念仏に生きていかれた方々を抜きにはいただけない内容です。「依報莊嚴」には、本願念仏に生きていかれた方々の生活が、自然環境をもって象徴的に説かれているのです。

聞法生活と「宝樹」

第一番目に「宝樹莊嚴」ですが、これは浄土を代表する莊嚴とだけだかれます。と申しますのは、「宝樹莊嚴」の結びだけが「このゆえにかの国を、名づけて極楽」と曰う。『聖典』二二六頁とあります。それに対して、他の三つの莊嚴は「かくのごときの功德莊嚴を成就せり。」と結ばれています。また、四番目の「化鳥風樹莊嚴」は「樹」で終わっています。つまり、説かれている「依報莊嚴」は、「樹」で始まり「樹」で終わるといふことです。

そうしますと、「樹」によって何が表されているのかということですが、結論から先に申し上げてしまえば、聞法生活が表わされていると言つてよろしいでしょう。聞法生活とは、救われていないから救われていこうとすることだと思っておられる方がいらつしやるかもしれません。確かにそういう側面もあります。しかし、そういう面ばかりではありません。今まさに救われていっている方々の姿でもあ

るので。本願に出あえば、出あった人の上に聞法生活が開かれてくる。本願が、聞法生活という形をとって表れてくるのです。そして、それが極楽の中心内容になるのです。

「樹」は大地の栄養を摂って限りなく成長していくものです。成長していくその姿に、本願に出あった方々の人生の姿が象徴的に表現されているでしょう。現実の中で、常に信が問い返されることを通して、信心とその世界を明らかにし続けていく。その歩みには終わりが無いことを教えてくださっているように思います。

親鸞聖人の生涯を見ましても、八十四歳の時の善鸞様義絶の出来事の前後にいろいろなものを書写されたり、『論註』に読み方を付けたりしておられます。関東教団の混乱・善鸞様義絶を通して、改めて如来の心をいただいていることとされた。そして、九十歳で亡くなるまで歩み続けていかれた。そういう親鸞聖人のお姿に、「宝樹莊嚴」が表わされています。

「長生不死の神方」とは?

「信巻」冒頭に信心の徳が讃嘆されていますが、その一番始めに挙げられておられます、

長生不死の神方(『聖典』二二一頁)

が、「宝樹莊嚴」を表しているものといいただかれます。信心は思い計らいを超えて、どのような人にも「長生不死」という生活を開くということでしょう。本願のお

みのりに出あえば、生涯かけて明らかにし続けていくべき課題をもった生活が、その人の上に展開されてくるということですから。そういう意味で、日常の様々なことで煩わされる生活が信心を明らかにしていく大事な場所になるといふことであり、そのことが生活の中心に据えられていくということでしょう。

「長生不死」は、曇鸞大師の故事にのっとっているのかもしれませんが、それだけではなく、「信巻」に記されており、阿闍世の獲信の言葉に即するものとしていただかれます。『聖典』二六五頁をご覧ください。阿闍世は、念仏の心が開かれたことを「無根の信」と受け止めています。そしてその喜びを、

その時に阿闍世王、善婆に語りて言わまく、善婆、我いま未だ死せざるにすでに天身を得たり。短命を捨てて長命を得、無常の身を捨てて常身を得たり。(『聖典』二六五頁)

と言っています。

ここに「短命を捨てて長命を得、無常の身を捨てて常身を得たり。」とあります。私は曇鸞大師の故事と合わせて、この言葉に、より強く「信巻」冒頭に記されている「長生不死」をいただきたいのです。課題を抱えてどこまでも歩み続けていく生活、それが救いの生活であり、そのことを「長生不死」という言葉で表わされているのではないかと思います。

以上のように、「宝樹莊嚴」は聞法生活を表すものであるといただかれることでもあります。

第十四回 二〇一六年二月十九日(金)

「往生浄土」とは

講師 竹橋 太氏 (儀式指導研究所研究員)



死後に対する見解

今日はインドの経典を手がかりとして「往生浄土」についてお話ししたいと思えます。往生浄土について、「死んだ後」なのか、「今」なのかということ議論されたりします。ただ、私はどちらが正しいのかをハッキリさせたいだけであれば、それは仏教の目的から外れてくるのだと思います。

「今をいただく」ということから往生を了解する、それはとても大事なことです。では「死んだらどうなるのか」と問われた時、皆さんならどう答えますか。現代を生きる私たちは科学を自分の一部にしていますから、「死んだら終わり」だという考えが物事の前提として存在しているのではないかと思います。そして、「死んだら終わり」という科学的な人間観と、『現生正定聚』という浄土真宗の教えとがぴったりと合う、だから往生は今なんだ」という結論の導き方をしたならば、それは問題だと思えます。このような姿勢で「死んで終わりではないと私は信じている」と言う人と往生について議論をしたとしても、平行線を辿るだけでしょう。

そもそも浄土に往生するということの最終的な目的は、仏に成る、仏の智慧をいただくということです。その上で、私たちの「死んだら終わり」「死んでも続く」というようなものの考え方自体が問われなければ、覚りも、仏に成るということも、往生とは全く無関係なものになってしまいます。「このわたし」という無自覚ではあるけれども堅固な前提が問われなければ意味がないのです。

毒矢の喩

このことを確かめるために「十四無記」についてお話ししたいと思います。マールンキヤブッタというお弟子さんの十四の質問に、お釈迦さまは答えなかつたということが『マールンキヤブッタの問い』というお経に書かれています。このお経は「毒矢の喩」とも言われています。さてこの中で、マールンキヤブッタは「人は死後存在するのか」「人は死後存在しないのか」ということを質問します。そして「答えを明確にして下さらないならば、私は修行を放棄する」とまで言うのです。それに対し、お釈迦さまは「お前はいつた自分誰だと思つて修学を拒もうとするのだ」とめづらしくお叱りになります。そして、そのように答えを求めらる者を、「毒を厚く塗りつけられた矢で射られた男」に喩えます。毒の矢が刺さっているのに、「誰が矢を射たのか」「この毒は何の毒か」などの問いが明らかになるまでは矢を抜かず、治療を受けようもしない男です。このままでしたら死んでしまうことは明らかでしょう。この男とマールンキヤブッタは同じだとお釈迦さまは言われます。

「世尊が明確な判断を示してくれなければ、私は世尊のもとで清らかな修行を行うまい」と、このように宣言する者がいたとしよう。その場合に、如来はこれらのことについて、明確な判断を示されないのであるから、彼は死んでしまうであろう。

『マールンキヤブッタの問い』バリ中部第63經つまり、死後の有無について質問すること自体がまさに、毒矢が刺さっているということなのです。それを抜き取る、つまり「覚り」を得ることこそ、出家して教団に入った目的なのです。しかしマールンキヤブッタはその矢を抜き取りもしないで質問を繰り返し、修行を放棄しようとした。それは宗教者としての死を意味する、ということだと思ふのです。

仏教としての「往生浄土」

十四の質問にお釈迦さまが答えなかつた

のは、意味のない不要な質問だから、ということではありません。「毒矢」に譬えられたことが重要だと思えます。つまり、問題の前提が違うから答えなかつたのです。「死後も私があるのか、ないのか」という質問自体がまさに「毒矢」であり、このような見解があるからこそ、生老病死という人間の苦があるということなのです。

仏教の「縁起」の教えを考えれば、そもそも死んで続くような「わたし」もいないし、死んで終わるような「わたし」もいません。いただいた全てのご縁が複雑に絡み合つて、ただいま一人の私というものができあがっているのです。十四の質問では、前提として「わたし」が存在していて、それが死んだらどうなるかを問うているだけなのです。お釈迦さまはそういう「わたし」がいるという私たちの在り方そのものを問題にされたのです。

仏教は無我を説いています。死後も人間が存在するのかしないのか。そのように考えること自体が、「常見」「断見」という迷いなのです。浄土に往生するということは、まさにどちらでもないということです。そういう「有無の見」を迷いとして明らかにするものが仏教だ」と、親鸞聖人は龍樹菩薩からいただいたことを、「正信偈」に詠われたのだと思えます。自分自身はどういう迷いを生きているのか、そのことがお聖教から問われなければ、「往生浄土」ということも仏教の教えとして明らかにならないのではないのでしょうか。

研究生報告

演劇  
「親鸞・恵信尼 結婚披露宴  
—750年の時を超えて—」

四月二十九日 於…東別院ホール

四月二十九日(金)、東別院ホールにて、研究生たちによる御遠忌記念催事、演劇「親鸞・恵信尼 結婚披露宴—750年の時を超えて—」、その後、二次会パーティー「飲んで、食べて、語らって」が開催されました。演劇には約四二〇名が、二次会パーティーには約一〇〇名が参加してくださり、ともにほぼ満席となり大盛況の内に企画を終えることができました。

この企画を進めるに当たって、研究生たちは御遠忌テーマ「ともに生きる—いのちのつながり—」とはどういうことなのかを課題に、何度も集まり、台本作りや演劇の稽古に励んできました。

劇中の「本当は一人で思うように生きていきたい。誰かと関わっても何も思い通りにならない。誰かとともに生きるなんてできるわけない」とともに生きるということは、同じ生き方をするのではなく、お互いの違った生き方を、相容れない考えを、足並みなんてそろわない人生を認め合うことではないか」というセリフは、御遠忌テーマからの問いかけに、彼らなりに応えようと表現したものです。それは、演劇本番への過程の中で、人間関係

が煩わしく、互いを傷つけ合いながらでしか生きられない、それでもその関係の中でしか生きることができない自分たちの在り方と一人一人が向き合った結果とも言えます。

そして、研究生が表現した思いをともに確かめたいと企画した二次会パーティーでは、劇の感想や御遠忌テーマについての思いを、観劇された方々とともに語り合いました。

観劇してくださった方々からは「とても良かった、楽しかった」という声も多く、また公演してほしいという声もあります。演劇を通して、親鸞聖人と、そして自分自身と真剣に向き合おうとしてきた研究生の課題を見に来てくださった方々と、少しは共有できたのではないかと思っています。

研究生たちは今回の企画の中で、お互いにおつかり合い、それでもお互いを尊重しながら、御遠忌へと歩んできました。その歩みが今後の教化活動の発展につながっていくことを願っています。

(教化推進要員 加藤浄恵)



演劇を終えた「劇団BOU'S」一同

大谷派の近現代史

第27回平和展

「けされた親鸞聖人」

四月二十二日～五月一日  
於…東別院会館

四半世紀を超えて春彼岸の期間中に毎年開催している平和展は、本年、期日を御遠忌に合わせての開催になりました。初めて訪れる方も多く、大谷派が過去の戦争協力を懺悔し、平和と向き合い続け、ゆく姿勢を広く知っていただく機縁となりました。展示会場に訪れた方々が口にしたのは、大谷派の戦争協力に対する徹底さへの驚きと、未来への危惧でした。

「ここまで協力していたのか」という落胆の声と、「また、同じ事が起こるのではないだろうか」という危機感を通じて、未来の平和への願いを口々に語る光景が多く見られました。

今回、特に注目が集まった史料は『必勝名号』でした。これは、南無阿弥陀仏と書かれた六字名号を中心にして左右を内側に折り込んで懐に納める『軍人名号』の一つの形状で、縦五寸×横三寸と手のひらに収まるサイズです。「三つ折り本尊」と呼ばれる本尊は現代でも手に入れることができますが、『軍人名号』ほど小さな名号本尊は戦時中の他に類例がありません。

大谷派が『軍人名号』の贈呈を始めた

のは日露戦争の時期からです。一九〇四年二月八日に日露戦争が始まると、同月十三日には七万五千九百七十四幅もの『軍人名号』を無料寄贈しています。

この名号を「お守り」と考えて戦場に持っていた軍人もいたようです。そして、折りたたんだ正面に「必勝名号」と書かれているものは、これまでの「平和展」でも出展することがない、大変貴重な史料です。必勝とは必ず勝つという意味です。しかし親鸞聖人が大切にされた南無阿弥陀仏の名号は、戦争に勝つという願いを含んでいないはず。

親鸞聖人は「教行信証」に「人民安樂にして、兵戈戦息す」(『真宗聖典』三九五頁)と引かれています。これは、仏教との出会いを通じて戦禍が終息してゆくという教えです。過去、親鸞聖人の教えは「けされ」てしまいましたが、それは過去に終わったことではなく、現在も進行し続けている私たちの課題として、来年春の彼岸会に開催予定の「第28回平和展」へと、繋げ続けたいと思います。

(研究員 新野和暢)



期間中は2300人を超える来場者が訪れた

# シンポジウム 「東日本大震災から 問われる私」

四月二十六日 於…東別院ホール

「この御遠忌で東日本大震災を課題と

しないわけにはいかない」という行事部の  
願いから立ちあがった東日本大震災班。

「現代社会と真宗教化」を課題としていた  
私も委員として加わることとなり、最後  
の行事であるシンポジウムでは図らずも  
司会を仰せつかりました。

第一部では、作家の高村薫氏に「生か  
された者として想う」という講題のもと、  
記念講演をいただきました。

高村氏は冒頭、「あの震災から五年、私  
は、社会は、何か変わったのだろうか」と  
いう自問から語りはじめました。そして  
「なぜ見ず知らずの他者の死に心を動か  
されるのか」という思いを吐露されま  
した。「第三者なのに、第三者でないとい  
う不安全感」は、震災によって心を痛めた  
多くの方が抱えている葛藤でしょう。「震災  
による死者が、生き残った我々に何がし  
かの気配をもって迫ってくる」という形  
で、誰もが抱える不可避な死が露わにさ  
れました。同時に「自らの死の他者性」  
という人間の抱える問題を語られ、「死を  
見つめ続ける、思い煩う、苦しみを徹底  
して見つめる」こと、人と出あい続けて  
いくことの大切さを述べられました。

第二部では、

玉光順正氏  
(山陽教区光  
明寺住職、元  
真宗大谷派教

学研究所所

長)を交えて  
対談を行いま  
した。

玉光氏は、  
「3・11の後、



右から 玉光氏、高村氏、大河内研究員

「何かが変わる」という実感を多くの人が  
抱いたが、何も変わることがなかった。な  
ぜなら、経済至上主義を生きる現代人そ  
のものが何も問われていないからだ」と  
指摘されました。「その直視しがたい人間  
の愚かさ」と、どうしようもない虚無感を  
いかに超えるのか」という高村氏の問い  
に、「念仏者の歴史に参画し、本願に生き  
る」という立脚地に立つことで自身のあ  
りようが相対化される」と玉光氏は語ら  
れました。

それはどこまでも人と出あい続けるこ  
とに他なりません。苦しみの只中にある  
人や今は亡き人と出あい直し、対話を続  
けることよってのみ自らを知る智慧を  
いただくのだと感じました。震災に限ら  
ず、現代社会における様々な人の苦しみ  
に耳を傾けていくことを続けなければな  
らないと学びました。

(研究員 大河内真慈)

## 史宗真の張尾

# 「親鸞聖人と尾張門徒 ―その信仰のすがた―」展

四月二十二日～五月一日  
於…名古屋教務所講堂

まずこの度の展示会にあたり、貴重な  
法宝物をご出陳いただいたご寺院ならび  
に諸機関様に深甚の謝意を表します。ま  
た、展示には至らないながらも、お忙し  
い中、調査をお許しくございました。寺  
院様、さらに、特設展示場を設えてくだ  
さいました工事関係者様にも御礼申し上  
げます。おかげさまで、三五〇〇名にの  
ぼる入場者を迎え、好評のうちに閉会す  
ることができたと自負しております。

ほぼ一年前に発足した展示実行委員会  
でしたが、当初は途方に暮れた状態でし  
た。しかし、そのような中で本当に助か  
ったのは、十六年前の「蓮如上人展」を  
執り行った、当教化センター・旧蓮如上  
人研究班の調査史料であり、その研究実  
績でありました。それと同時に、同朋大  
学の安藤弥生先生にアドバイザーとして実  
行委員に加わっていただき、同朋大学仏  
教文化研究所のご協力を頂戴することが  
できましたのも、まことに心強く、精緻  
な調査・研究に基づいたご教示はとて有  
益でありました。

課題も浮  
き彫りに  
したよう  
に感じま  
す。七〇  
点のみの  
展示に限  
りました  
が、尾張  
をはじめ  
東海地域  
には、ま  
だまだ多くの法宝物が伝存しております。  
ただ正直に申し上げて、それらの中には  
このまま埋もれてしまうのでは、との危  
惧を抱かせるものがあることも否めない  
のです。しかし、それら一点一点は真宗  
の教えを伝えてきた「信仰のすがた」に  
他なりません。図らずもアンケートに「門  
徒の心意気を感じました」との言葉があ  
りました。やはり、実際に法宝物に触  
れることによって初めて、私たちは真宗  
門徒の歴史に連なっていると自覚できる  
のではないのでしょうか。



安藤氏によるギャラリートークの様子

その意味では、今後も地道な史料調査・  
整理を欠かすことはできませんし、この  
ような基礎的研究はさらに重要になると  
思われます。最後にそのことを申し述べ、  
本展示会の報告といたします。

(研究員 小島 智)

2016年度 聖典研修  
『仏説阿弥陀経』  
—その教義と真宗の儀式—(最終年)

- 期日 (全8回)  
第1回 2016年 9月 29日 (木) ①  
第2回 10月 28日 (金) ②  
第3回 11月 17日 (木) ①  
第4回 12月 9日 (金) ②  
第5回 2017年 1月 19日 (木) ①  
第6回 2月 17日 (金) ②  
第7回 4月 14日 (金) ②  
第8回 5月 18日 (木) ①
- 講師 ① 廣瀬 惺氏 (同朋大学特任教授)  
② 竹橋 太氏 (儀式指導研究所研究員)
- 日程 午後6時～ 講義(90分)、休憩(20分)  
午後7時50分～ 全体座談、質疑応答  
午後8時30分 終了
- 会場 名古屋教務所1階 議事堂
- 持ち物 『真宗聖典』
- 聴講料 各回500円 ※一般聴講可 ※全8回券3,500円  
※教師陞補のための「聴講証」発行対象研修
- 問合せ 名古屋教区教化センター  
電話 052-323-3686 fax 052-332-0900

真宗門徒講座  
「真宗門徒のくらしとつとめ  
—みんなで話そう お内仏の疑問(仮)—」

- 期日 (全7回)  
第1回 2016年 9月 9日 (金)  
第2回 10月 7日 (金)  
第3回 11月 15日 (火)  
第4回 12月 6日 (火)  
第5回 2017年 1月 13日 (金)  
第6回 2月 13日 (月)  
第7回 3月 3日 (金)
- 時間 午後2時～午後4時15分 (予定)
- 内容 講義と座談
- 会場 名古屋教務所1階 議事堂
- 参加費 300円 (東別院カード「シュルタ」適用)
- 問合せ 名古屋別院教化事業部  
電話 052-331-9578 fax 052-331-9579

2016 あいち・平和のための戦争展

平和展資料を展示し、平和展スタッフが参加します。

- 【日 時】 8月11日(木)～14日(日)午前10時～午後6時(※最終日～午後3時)  
【会 場】 名古屋市公会堂4階ホール(地下鉄およびJR「鶴舞」徒歩3分)  
【入場料】 500円(高校生以下、障がい者(介助者含)、無料)  
【問合せ】 2016 あいち・平和のための戦争展実行委員会  
電話 052-931-0070 / FAX 052-933-3249

INFORMATION

教化センター日報  
■2016年3月～2016年5月

- 3月1～4日 研究生・実習「名古屋別院 晨朝法話」  
4日 研究生・実習「真宗門徒講座(書いて味わう「正信偈」⑩)」  
10日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」打合せ  
17日 教化研修「聖典研修⑤」(廣瀬惺氏)  
24日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援  
25日 研究業務「平和展」学習会  
4月11日 研究生・御遠忌行事「親鸞・恵信尼 結婚披露宴」リハーサル  
14日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」打合せ  
18日 研究生・御遠忌行事「親鸞・恵信尼 結婚披露宴」公開リハーサル

- 19～20日 研究業務・御遠忌行事「親鸞聖人と尾張門徒」設営  
19～21日 研究業務・御遠忌行事「平和展」設営  
21日 研究業務・御遠忌行事「親鸞聖人と尾張門徒」内覧会  
4月22日～ 真宗大谷派名古屋教区・名古屋別院 宗祖親鸞聖人750回御遠忌法要  
5月1日 【教化センターが関わった主な行事】  
・展示会「親鸞聖人と尾張門徒 -その信仰のすがた-」(全日)  
・第27回平和展「けされた親鸞聖人」(全日 ※4月25日を除く)  
・シンポジウム「東日本大震災から問われる私」(4月26日)  
・演劇「親鸞・恵信尼 結婚披露宴 -750年の時を超えて-」(4月29日)  
5月16日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」事前学習会  
25日 研究生・学習会「現地研修 事前学習」  
30日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」「いっぶく処」後援  
31日 研究生・現地研修「比叡山」(～6月1日)

お詫び

2016年4月14日付の文書「『センタージャーナルNo.96』の誤掲載のお詫びと差し替えについて(お願い)」にてお知らせしていますように、前号におきまして編集部の不注意により誤掲載がありました。今後このような事が無いように細心の注意を払い、編集を行ってまいります。講師並びにお読みいただいている皆様方に、重ねて深くお詫び申し上げます。

《編集子雑感》

この度、名古屋教区・名古屋別院 宗祖親鸞聖人750回御遠忌法要が円成した。事務職員の一人としての率直な感想を綴るならば、怒涛のように過ぎてゆく日程に追われ、気付けばあつという間に終わっていた…というのが正直なところである。

その後、周囲の方々が口を揃えて「御遠忌後が大事だ」と述べていたことが印象に残っている。考えてみれば私自身、とにかく無事に日程を終えられるように…という思いだけが先行し、自分の仕事や役割に専念するあまり、期間中の行事、催事、法要等などのような願いが込められているのか、ということにまで思いを馳せるだけの余裕がなかった。余

裕はあっても、考えることを拒否していただけないのかもしれないが……。

この度の御遠忌から私は何を問われたのか。今のオーバーヒート気味の状態では、冷静に振り返ることは難しい。そして私だけでは独りよがりの総括になってしまうであろうことも目に見えている。御遠忌に携わった有縁の方々とともに、時間をかけてゆっくりと確かめていきたい。(て)

■教化センター

〈開館〉月～金曜日 10:00～21:00  
土曜日 10:00～13:00  
(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)  
〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間  
夏期休館 8月11日(木)～8月17日(水)  
～お気軽にご来館ください～

■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ【お東ネット】<http://www.ohigashi.net>

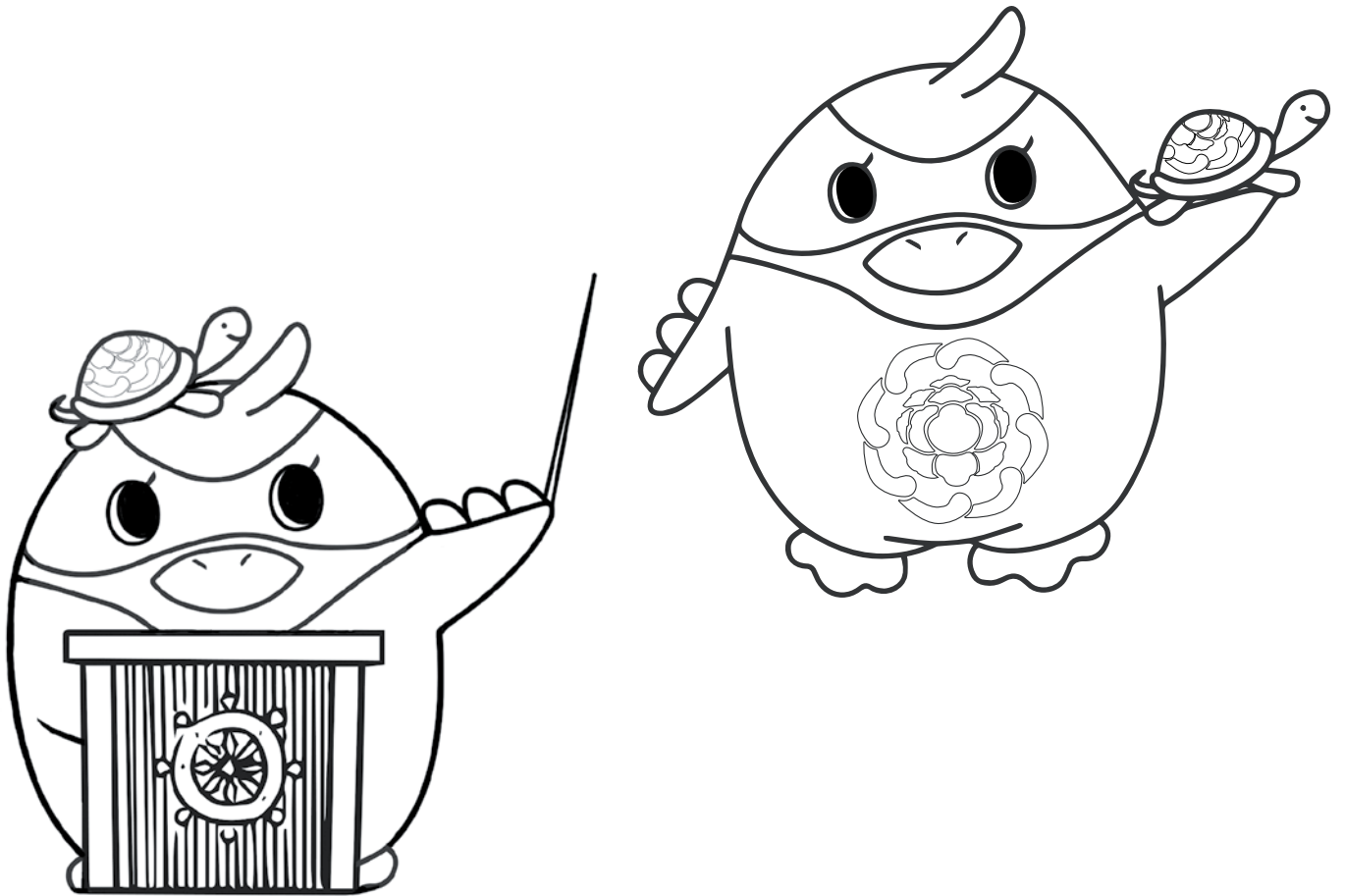
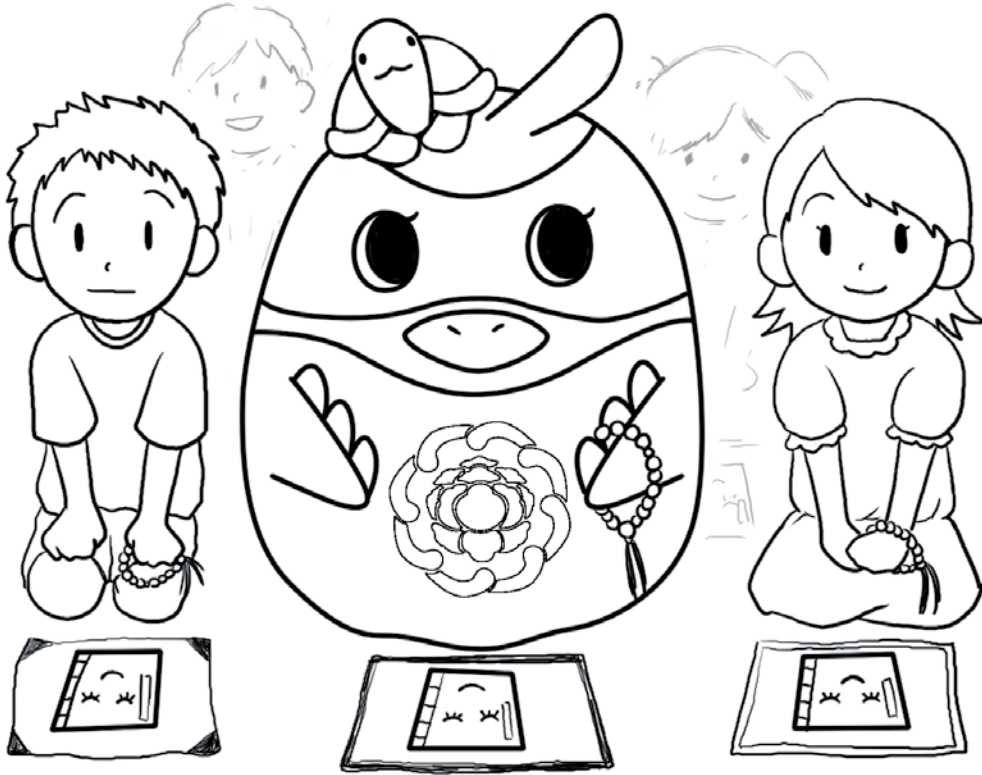
■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

お東ネット

検索

イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。



- データを希望される場合はお問い合わせください。
- 差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまでお知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などもお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。  
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。